

松蔭 校長室だより

—校長から保護者の皆さまへのメッセージです—

2019年3月1日 発行

松蔭中学校・高等学校
校長 浅井宣光

「『私は私』としか思っていません」大坂なおみ “I am still becoming(私らしく生きている)” ミッシェル オバマ

高校卒業式を挙行了しました

校長室の机の前に、華道部からいただくお花が飾られています。先月上旬には、数本のネコヤナギの芽が日毎にふっくらと色付いて、少しばかり早い春を感じさせてくれました。(右写真) 川辺に多いこの樹木は、俳句では春の季語とされ、他のヤナギよりも早い時期に穂を出して新たな季節の訪れを告げます。花言葉を調べてみると「自由」や「思いのまま」「開放的」など、制限や束縛を受けないあり様を表わす語が並びます。



3月1日、高校第71回生の卒業式を挙行し、139名に卒業証書を授与しました。卒業生の皆さんは、旅立ちの日を迎えるとともに、翌日からは、高校時代とは比較にならない大きな自由を手にするのです。毎朝、当たり前のように袖を通した制服は、懐かしい思い出となります。大学生として母校に立ち寄ってくれた卒業生が、口々に「もう一度制服を着たい」と言うことがあります。新しい環境に戸惑う中で、楽しかった高校時代に戻りたいという思いが募るようです。一方で、毎日何を着ようかと悩むのが面倒だ、との声も聞きます。服装も髪型もどうぞご自由に、となると、逆にストレスがたまるのでしょうか。やりたいことをやる自由も、やるべきではないことをしない自由も、上手にコントロールするためには、強い意志が必要かも知れません。いつでもどこでも自由にスマホを使えば、外の世界と簡単につながりを持つことができますが、スマホ依存症に陥って健康を損ねたり、人間関係を壊したりしては元も子もありません。人生は選択の積み重ねといえます。賢明な小さな選択を心がけたいものです。校長式辞では、2人の女性を紹介し、その生き方に学ぶことを卒業生への最後のメッセージとしました。その一部を紹介します。

皆さんのご卒業にあたり、今、脚光を浴びている2人の女性のエピソードを紹介します。個性あふれる生き方に、学ぶべきところがあるように思うからです。一人目はテニスプレーヤーの大坂なおみ選手です。昨年9月の全米オープン選手権に続き、今年1月の全豪オープン選手権でも優勝しました。彼女はハイチ系米国人の父と日本人の母との間に生まれ、幼い頃に住んでいた大阪でテニスを習い始めました。4歳の頃に家族で米国に移住し、その後トップテニスプレーヤーの地位へと駆け

登りました。カタコトの日本語を交えながら流暢なアメリカ英語を話し、日本人選手として活躍している彼女は、テニスだけでなく様々な面で注目を集めています。

全豪オープン優勝後の記者会見で、ある記者が次のように尋ねました。日本人初の優勝と話題となっているが、自身のアイデンティティについてどのように考えているか、という質問でした。

彼女は少し間をおいて答えました。「『私は私』としか思っていません。」

正面を見すえて話す、22歳の女性の真剣な表情はとても印象的で、彼女の強さの秘密は、ここにあると感じました。これまで私は皆さんに、これからグローバル社会で生きるのだから、スクールモットーの「オープンハート、オープンマインドの精神」で、国籍や民族、文化の違いなど、隔ての壁を乗り越えてほしいと話してきましたが、大坂選手は、異なる角度から周りの世界を見ていることに気付きました。彼女から見える隔ての壁は、足もとに小さく映っているに過ぎないようです。

それから程なく、ある女性のインタビューを見る機会がありました。これが2人目の女性です。名前はミッシェルオバマさん。アメリカ合衆国の前大統領バラク・オバマさんの奥様です。ミッシェルさんは弁護士資格を持ち、2人の子供を育てながら、8年間ファーストレディを努めました。史上初のアフリカ系アメリカ人の大統領を夫に持つ、これまた史上初のアフリカ系ファーストレディに対しては、今なお人種偏見を持つ人々や敵対する政治勢力から心ない言葉を投げつけられたり、家族の生命の危険を感じるような出来事もあったそうです。昨年秋、彼女はこれまでの生涯を振り返り、自叙伝を出版しました。そのタイトルは“Becoming”。「成長」や「発達」といった意味のほかにも、「自分らしい」や「自分流」「自分に似合う」というニュアンスで訳すことができるようです。

彼女は次のように語っていました。子供に「将来、何になりたいの？」という質問を、大人はよくするが、これほど愚かなものはない。その理由は、将来を限られたものにし、何か制限を加えてしまうように感じるからだそうです。ある職業や地位を、人生の目標として決めてしまうと、常に努力を重ねようという姿勢や、成長し続けようとする意志を止めてしまう。それはとても悲しいことだ、というのです。そして55歳の今も、「I am still becoming」(私は今も私らしく生きている)と、現在の自分を表現していました。ファーストレディをつとめ、社会的には十分に成功を収めた女性が、「成長が止まることほど悲しいことはない」と言っているのです。

大坂選手の「私は私」とミッシェルさんの“I am still becoming”。表現は異なりますが、自分で自分らしい人生をつくりあげる、という強い信念を持っているようです。人生に対するこの信念を、卒業生の皆さんには心に抱いていただきたいものです。何歳になっても、「私は私らしく生きています」と、胸を張れる生き方をしていただきたいと思うのです。さらに付け加えるならば、皆さんはこれまで、聖書に触れながら、祈りとともに神様の祝福の中で松蔭での学校生活を送ってきました。神様は大坂選手やミッシェルさんに対して、愛と慈しみの光を照らしてこられました。まったく同様の光が、日本のこの松蔭を卒業する皆さん一人ひとりにも向けられていると、私は確信していることもお伝えしておきます。どうぞ、自信をもって、これからの人生をご自分らしく歩まれることをお祈りいたします。(2018年度松蔭高等学校卒業式 校長式辞より)

(裏面に続く)

中学入試「算数」の出題から

次の問題に式と答えをかくと、下のようになりました。問題のつづきを のなかにかいて完成させましょう。

(問題) 女子 20 人, 男子 15 人のクラスで社会のテストをしました。クラスの平均点は 72 点でした。

(式) $20+15=35$ $72 \times 35=2520$ $68 \times 15=1020$ $2520-1020=1500$ $1500 \div 20=75$ (答え) 75 点

(2019 年度松蔭中学校 B 方式入試 算数より抜粋)

中高一貫校の入試では、思考力型試験や適性検査型試験を導入する学校が増えてきました。首都圏では、PISA 型入試やプレゼンテーション型入試と呼ぶ入試方法もあります。2020 年度からの大学入試改革では、センター入試が「大学入学共通テスト」となり、知識や技能の定着のみを検査するのではなく、それらを活用する「思考力・判断力・表現力」を評価する設問が多くなります。私立中学も、その基礎力なり素養を持つ生徒を求めようと、新たな入試方法を導入しているのです。本校の中学入試では、思考力型試験を採用していませんが、2019 年度の算数の問題では、上記のように式と答えを見て、問題文を考える、という新傾向の出題をしました。プレテストでも同様の出題をしましたが、思考力や表現力を問う設問は、本校に限らず増えていくでしょう。

新しい授業の「かたち」を目指して

教育関係の雑誌に、大学のある先生が次のようなこと書いておられました。「中学時代に落語家のレコードを買って聞いていたが、今それが、大学の講義で話す『間』の取り方やちょっとした冗談をはさみこむやり方を学んだ。将棋にはまっていた大会で優勝したが、先を読むことを学んだ。大学時代には友人と飲みに行って議論し、論理的思考と説得力のある話し方を学んだ。このように、学校の授業や大学の講義の外で、自分にとって大事なものの部分を学んだ。だから、現在の学校教育や授業改革の論議の中で、何でもかんでも教員に任せて、授業に詰めこもうとするのは無理がある。」

約 10 年ごとに改訂される学習指導要領は、時代ごとの教育改革の方向性を定めてきました。2021 年度から、中学、高校の順に改訂が行われますが、今回の改訂では、学校が育成すべき児童・生徒の資質と能力として、「知識と技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力や人間性」の 3 つの分野が挙げられ、すべての教科の授業で取り扱うこととされています。(文部科学省「新しい指導要領の考え方」) しかし、上記の記事の筆者は、授業に何でもかんでも詰めこむことは、物理的に不可能で、学生時代には教育課程外の活動や校外での経験が大切なのだ、と主張しています。

これに対して私は、工夫次第で可能であると考えています。その工夫の成否がポイントであり、成功すれば、学校教育の質全体が向上すると思うのです。現在、校内では 2019 年度の教育活動の準備をしていますが、先生方とは授業や学習指導の方法について、次の 3 点を確認しています。

- ① 教材や授業方法について研究を深め、十分に準備して生徒の「自学自習の姿勢」を定着させ、家庭学習の取り組みにつながるような指導を実践できるようにすること。

- ② 講義形式一本やりの授業を中止し、「受ける」授業から「参加する」授業へと転換させること。例えば、アクティブラーニング方式の導入や ICT 機器の活用について研究をすすめること。
- ③ 授業内容では、「教科横断」を意識して、他教科の学習内容と関連付けたり、総合的な学習の取り組みや学校・学年行事、海外研修等と関連させたりして指導すること。

タブレットや電子黒板など ICT 機器を使用することは、スマホ世代の子供たちには馴染みやすいことですし、好奇心を刺激し、そこから生まれる興味や関心は、黙って授業を受ける形態から、話して「参加」する授業への転換を容易にします。「参加」する授業には「話す」ことのトレーニングも含まれることになります。今年度から中学で行っている「国語力」授業は、語彙力や読解力に加え、「話す」こともポイントの 1 つです。旧来型の講義形式による授業では、「黙って授業を聞きなさい」と注意されるわけですが、「話す」力の育成を図る過程で、論理力、表現力などを身に付けることができます。50 分という授業時間の制約は、時間配分を綿密に行うことで、メリハリのある内容にすることが可能です。授業の随所に他教科の指導ポイントを組み入れたり、学校内外の行事や出来事、事件をリンクさせたりすることは、授業の内容を現実的に即して深めることになりま。工夫ある授業により生まれる教育効果は、従来の授業形態では身に付くことがなかった能力を高めます。さらに、課外の活動や校外での様々な経験は、人間の幅をより一層広げる機会として役立つことでしょう。今後、新しい授業の「かたち」を目指して作業を始めますが、生徒一人ひとりが自信を持ち、自分らしく生きる力を身に付ける学校の「枠組み」や「工夫」作りを常に念頭に置きたいと考えています。2020 年度中学 1 年生より、下記のようなコースを設ける予定ですが、学校行事も含めて教育活動全般の再点検を行うことにしています。(下表はホームページに掲載しています)

